

八月作品

月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

はな

古屋 祥子 群馬

昨日よりなほ濃くみどり増してをり芽吹き道の道をえらびて走る
山藤の蔓は自在に崖を這ひ谷あひ深く花咲かせをり
畦みちの、街路の、民家の軒先の小草に見入り帰路の進まず
黄牡丹のはな十あまり散り崩れ根方覆へりはなびらいろに
日々通る道の躑躅のはなざかり「今日でお別れ！」花は頷く

揺れたとき

大松 達知*東京

揺れたときワイングラスを持ち上げただれにも見られなかったこの部屋
ほんとうだ！ テレビの予報見てのちにスマートフォンを見て妻が言う
マンホール数えつつ駅にゆく朝の、そんな朝わがこころ危うし
ことば得てしまい未来を得てしまいヒトのみが死を恐れるという
楊枝もて頬をつんつんつんつんとする夜もある痒みの患者

絡繰り

小嶋 一郎 佐賀

この四月葬の続きて是非も無しみなり三人はともにわれの教へ子
少年の日に拾ひたる一片の石鏃やじりは癒やすステイの午後を
寝るまへに飲む錠剤のこの苦み舌に残りて日付が変はる
起きしなに目薬を注すこの習ひ十年経ても的をば外す
一枚を引けば次なる一枚が出づるティッシュかたくの絡繰りたふと

リラ弾き

水上 比呂美 東京

組板はニワトリ切りてネギ切りてうつつかりヒトのユビ切るところ
ある夜は薔薇の花首幾十か剪りて湯船に浮かべ眠らむ
パスワードチガッテイマス、チガッテイマス、チガッテ…とパソコンの言ふ
後の世はリラ弾きになり草原を仔山羊とともに旅してみたし
草原の仔山羊とならむ夕されば牧童の身にすり寄る仔山羊

☆

☆

水島晴子 兵庫

奥村晃 作* 東京

時間の舟^と赴くままに生き来たり果てなる老いに今をくるしむ
取り囲み締めつけるもの圏外へ押し遣らむとする何かのちから
ふた親はわれを見捨てて逝きしとぞまた不埒なる思ひがめぐる
「吸われて」と技師繰り返す敬語らしき指示で息吸ふうすくらがりに
よるめきてたたずみをれば身に近く青き翼の蝶ふたつ飛ぶ

武田弘之 神奈川

森重香代子 山口

こどもの日、母の日そして看護の日、五月は忙^せし親も子供も
プーチンの演説柔く不気味なり五月九日赤の広場に
イリユーシン80の飛ぶなかりしを天候ゆゑと言へり怪しも
侵攻のプロパガンダはウクライナにゐるはずもなきオナチを言ふ
在り慣れて本土復帰を祝へども沖繩びとの思ひはいかに

高野公彦 千葉

日影康子 富山

「年を取ることは軽度の重労働」笑みつつ言ひし本屋のご隠居
わが裡^{うち}を灯^{ひとも}る船のごとく過ぐ世阿弥の言葉(老いて残る花)
つきつきと夜ぞらを照らす大花火のひかりの中を燃え殻落ち来
大花火夜ぞらにひらくそのひびき瀑声に似て涼しきひびき
打ちあがる花火と、落ちる燃え殻と、夜ぞらで生と死がすれ違ふ

「太陽が見たい」とぞ言う数カ月地下深き部屋に閉じ込められて
酷い現場これでもかこれでもかと映すけど戦争とは常にそついうものだ
明らかに緩い手続けて打つキミのキミ言う如く認知症かも
緻密なる脳の働きを神に謝す碁を打つ時も歌作る時も
そう長く生きられるとは思わねどききのう今日在る幸をしぞ思う

朝食を終へて間なきにとろとろとおそふ眠気に身は耐へてをり
酌みかはし安けくゐたる餉もはるかいきなり食ぶるだけのご御飯
晩酌のお供に、などと言ひをりきたちまち終るひとりの夕餉
湯浴みして躰を横たふる安楽に目を閉ぢてをり庭を吹く風
黙ふかく師のかたはらにさもらひし安立スハル氏の寛^{ゆた}なりし膝

救急車に夫入院す庭隅に百年ざくら咲き初めし朝を

入院し夫あらぬ空^{から}のベッド脇に常の夜のごとわが寢床敷きぬ
体重計に乗りて驚くわが体重十五キロ減りぬ介護のゆゑか
大型連休終へて三日目部屋へ来て「小遣ひの前借を」と学生の子孫は
寝むとして部屋へ来たれば枕辺にプレゼント置かる明日は母の日

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

ひそやかに歌を詠み来し人よりの葉書に甦る学生時代
国学院短歌研究会にゐて幻想の景詠みにし人よ

共に持つ歌詠みきたる感慨はおろそかならず五十年過ぐ
五月雨につつまれ眠るあぢさゝよ時の刻みに命をつなぎ
また雨が降りくる気配ざわめける五月の葉群濃き薄きあり

桑原 正紀 東京

小島 ゆかり 東京

やはらかく五月の雨のふる苑にむらさきあはき藤の花ぶさ
あら草を踏み分けゆけばたちまちに足首濡るる五月の雨に
アカシアの花ぬらす雨したたりて傘に鳴るとき傘は抒情す
雨の苑の空よぎりゆくカラス二羽こゑこぼすなく森辺へ向かふ
くしやみして空をあふげり翼なきものはひと生を地に低く生き

狩野 一男 東京

木畑 紀子 京都

春の日のとある夕ぐれこみあぐる怒りに堪へてちまた歩みき
春なれやあれやあれやをくりかへしかんざみかんやまつだほんかん
一宇川清子師匠は気前よく断りにけり我が弟子入りを

大学は社会の空気に負けたのか そも素晴らしい新理事長か
行く春のサタデイ・ナイト・フィーバーをうちこはすまで降りまくれ雨

だれもぬぬ園のプランコゆれ出せりさくらはなびらいちまいのりて
おほいなる梅雨前線の竜が生る天気図の日本列島のうへ
レンタル店コロナで失業機あまたなり大、中ダンプや油圧ショベルら
ビニール傘差して歩めば海月なりただよひ行けり身も透きとほり
めぐりより消えたるものよ馬の声、牛、豚の声、にはとりのこゑ

あけがたのやさしい雨をききながらあの日あの日の自分がきらひ
縄跳びし逆上がりしてなつぞらのピースのやうなこどもからだ
武蔵野は青葉ごもりのころとなり武者の貌した黒揚羽くる
枝豆は塩にぬれつつコロナ以前ロシア侵攻以前のみどり
命日がひしめく青とおもふなり露天市場であふく夏ぞら

尾羽ひろげさへづる青き鳥マーク億万羽飛ぶネットくうかん
リツイートまたリツイート枝移りする鳥たちの令和今様
野に出ててひばりのこゑを全身に浴びむよ何にかなしむわれか
たんぽぽのあはひにさくらはなびらが散りつつ春の点描画を描く
セーターを着つぶし靴を履きつぶし自肅三年修行のごとし

島田 暉 神奈川

住宅を爆破されたる街通り瓦礫あまたと銃殺死体

母を呼び子を呼ぶ声のかすか洩れ暗き地下路に詰める難民

避難兇ら月さへ食べるものに見え地下路口より月を見飽きず

花びらのやうな雪降る空見上げ白髪 of 祖母地下口に立つ

望月は死者のたましひ金色の屍者を吸ひ込み樹末に高し

田宮 朋子 新潟

あてやかな古代むらさきまとひをり砂利の隙間のすみれの花は

交差点よぎる柳絮に気づきたり気づきはいつもわが意思のほか

ふるさとの潮かぜふかく吸ひこみてこころの半身浴をするわれ

胸底の澱しづまりぬグレゴリア聖歌聴きある夜のひととき

ゆふかげの射してけぶれる麦畑あをき獣の毛並のごとし

津金 規雄 神奈川

双眼鏡の視野のうちにて夕桜白くゆたけきボディーを揺する

〔可及的速やか〕といふニホンゴを発する人らの審議はじまる

春の丘降り来る人の声の色に淡きあり濃きあり いづれをみな子

ブーチンに近き指揮者のゲルギエフ ミュンヘンフィルを解雇の報あり

茎のぼる蟻もつばみもそれを視るホモ・サピエンスにもあまねき春陽

小山 富紀子 京都

ばあちゃんの松ぼつくりのヴァレリエも吹き飛ばしたるロシアの爆風

書き慣れぬ「殺戮」「虐殺」ためらはず書けるやうになりしこの春

願はくは花の下にて死にたしと詠みたる人の生きし世思ふ

平和時の飛行機雲を三筋置く黄金週間最終の空

亡き父の新兵のさま書きくれし父の従妹の九十二歳

清水 正子 神奈川

おめでたう米寿ですねと医師いへどさくら樹木葬きめしは知らず

咲きて散るさくらよさくら嬢われの地に帰る日も遠からず来む

美しいことばでいへば死は星になること春の夜空をあふぐ

星空のメッカへの旅あきらめて今日の眠りにつきたりわれは

無から有へ恋のごとくに始まればやがて終らむ宇宙といへど

後藤 美子 北海道

リュック、バッグ、コートのポケットに常備する白き必需品不織布マスク

集音器老眼鏡を持ち歌会へ八十代の終り近づく

束の間に今年の桜散り果てて過ぎゆきにけり一期一会の春

いそがしき日々ゆたかな歌を生むひとを敬ひ『雪麻呂』を読む

あたらしき歌帖をつくる四月尺小さきわが生きると言へど記さむ

福 士 り か 青 森

田 中 愛 子 埼玉

10

介護支援申請をする、猫を飼ふ、新しきことおほき還曆

これの世に生れて半年やはらかき子猫ちひさくコロラと鳴けり

三代をさかのぼりたる血統書を猫にわたせば齧りはじめつ

猫の名はカルム(穏やか)水張田の早苗をゆらすはつなつの風

二キロづつ歩く朝夕オドリコソウ、スズメノテツポウはるか岩木嶺

藤 野 早 苗 福 岡

たらちねを思ふところに置き換へることばさがしてゐる菜種梅雨

あけぼのの山はゆかりの物語 桐の野藤のうらむらさきの

性別をゆき交ひのちを繋ぎゐるブロンズガエルの半眼不遜

夫か猫選べと言はれ猫選ぶ妻九割のその中にある

わたくしと世界がとほい 航空性中耳炎病む市ヶ谷の夜

風 間 博 夫 千 葉

警報機鳴り始めまだ遮断機は立つたまま(走る?)もう若くない

信号が赤でも赤の手前まで車は走り時に停まらず

はつはるの空 風、紙鳶とも書く風ののほりゆきたり

上り坂帰りは下り坂うれしエコバッグ重く両手に下げて

刻みネギたつぶり入れてあつあつの丸亀製麺うどんを食ひぬ

北まくらで春のふた夜を眠るなりなきがらとなれる母のかたはら

母の歌集、わたしの歌集、堀辰雄…をさめて母の舟しづみさう

雨のなか両杖つきてお別れにきてくださつた母のともがき

もうすこし存へたなら庭先のでまり白く咲きたるものを

たましひは残ると常に言ひてぬし母よその魂のすがたを見せよ

橘 芳 園 新 潟

十五人の同僚に僧四人ゐき初任校なりし定時制高校

油手に夜をきて学ぶ生徒らにはげまされつつ歌はじめたり

僧、教師ともどもうまく勤むるをこころがけて悔いがのこりぬ

僧なりと言ひたることのならしに職場職場で僧知られたり

檀徒の喪ありて休めば教員はアルバイトかとささやかれたり

鈴 木 竹 志 愛 知

マリウポリ陥落の朝いつになくスマホアプリの機嫌はわるし

ああつひにアゾフ大隊降伏す要衝マリウポリ死守せむとせし兵

束の間の平和の時代と歴史書に記さるること無きを祈れり

人智とふ言葉空しく戦争の止むことはなく未曾有の惨ぞ

戦争が始まりてより元首相発言増しぬ軍備にかかはり

原賀 瓊子 東京

葬礼のその夜にのる飛行機に長崎―東京間をもだせり
海上の闇を通らずけふANAの最終便は街上を飛ぶ
飛行機は夜の街上をとびつづけ金襴緞子の日本列島
原発の根つこを見たりありあまる電気のパンに生きるわれらか
一世紀いや半世紀あともどりして文明の時計ただしたし

水上 芙季 東京

粗大ごみシールの付いた姿見でちらり前髪チェックする朝
姿見の裏のほこりを払ひをりごみ処理場へ行く姿見のため
横置きにした姿見は去るわれのくるぶし映すごみ集積場で
カフェイン断ち、小麦粉断ちする友のゐてライン既読にならぬ五月よ
姿見の無い部屋にゐて速報がテレビで流れ人の死を知る

大野 英子 福岡

死んだやうな ゴールデンワウラー G W はアラン・ポーのミステリー読みまた生き返る
何もないいちにちだけど水平線に沈む大きな エルドワード 黄金郷あり
日没と日暮れが遅れゆく夏を寿命が少し伸びる心地す
八年の草取りで履き潰したる父のウォーキングシューズさよなら
いつの間にか白花紫蘭咲きそろひ庭にましろきひとすぢの道

松尾 祥子 東京

情報は東西南北裏表あり あぢさゐに蛞蝓が湧く
キエフからキーウに変はり死者の数増えてこの世の真実見えず
眠らねば食べねば生きられぬ人を月が照らせり星が照らせり
玉ねぎを剥いても剥いても真実はどこにもなくてみぢんに刻む
ヒエラルヒーの頂点に立つ快樂を人は捨て得ず 神は嗤ふか

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175 0092 東京都板橋区赤塚七一―五―一六

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448 0047 愛知県刈谷市高津波町三―四〇八